人は死んだらどこへ行けばいいのか(9)

草木供養塔を前にして思うコロナウイルスは成仏できるのかと…

―草木供養塔

佐藤弘夫 Satoh Hiroo
東北大学大学院教授

仏教が日本列島の隅々にまで浸透するなかで、人は無論のこと、すべては成仏できるという思想が醸成され、信仰された時代があった。それは現代でも生きているのか。だとすれば人を襲う新型コロナウイルスもそうなのではないか。

東北の地に建てられた山の寺

この連載でもなんどか触れましたが、わたしが幼少期を過ごしたのは宮城県の最南部に位置する丸森という小さな田舎町でした。阿武隈川に沿った町の中心部の家並みを抜けて南に向かうと、水田地帯が途切れて山林の風景に変わり、阿武隈川の支流・内川がつくり出す渓谷が現れます。丸森町を代表する観光名所である不動尊公園は、この渓谷内にあります。

不動尊公園では屹立する巨岩の間を縫うようにして内川の清流が流れ、いたるところに滝や淵をつくり出しています。絶好の水遊びのスポットとして、夏には多くの家族連れや若者で賑わいます。公園内ではキャンプやバーベキューを楽しむことも可能で、周辺にはレストランや国民宿舎もあります。

公園に隣接し不動尊公園の名称の由来となった駒場滝不動尊愛敬院（本山修験宗）があり、江戸後期に建てられた仁王門では二体の赤い金剛力士が境内を守護しています（写真❶）。公園から渓流沿いに一時間ほど遊歩道を歩くと、高さ十二メートルの清滝に辿り着きます。ここにも不動尊が祀られており、古くから修験者の行場であったと伝えられています。

写真❶宮城・駒場滝不動尊愛敬院の仁王門

伝承によれば、この辺りを聖地として定めたのは九世紀の僧、慈覚大師円仁でした。円仁開創と伝えられる寺は立石寺や恐山など、東北に数多く存在します。そのため単なる後世の伝説とみる向きもあるのですが、清滝を見下ろす標高五百十五メートルの堂平山（どうへいざん）の山頂付近からは、平安時代中期に遡る礎石や瓦がみつかっています。かつてこの地に、かなりの規模の山岳寺院があったことはまちがいありません。

同じ宮城県の仙台市泉区根白石の堂庭（どうにわ）山（やま）では、やはり頂上に近い部分で平安時代中期の寺院の跡が確認されています。国見山廃寺（岩手県北上市）が山の寺としての寺容を整えるのもほぼ同じ時期でした。東北地方では十世紀ごろから集中的に山の寺が建立されていくのです。

不動尊と堂平山一帯もまた、そうした動きのなかで、霊地としての整備が進められていったものと推測されるのです。

世界で唯一と思われる供養塔

駒場滝不動尊愛敬院には、江戸時代から近代にかけて建てられた数多くの石碑があります。数年前のことです。境内を散策していたわたしの目に、大理石で作られた比較的新しい石碑が止まりました。それまでなぜか見過ごしていたものですが、目を凝らすと「草木塔」という字が刻まれているのが分かりました（次頁の写真❷）。その後ろには、この塔の建立の由来を墨で記した案内板が立てられています。長く雨風にさらされていたため、全体的に字が薄れてしまっています。それでも、わたしたちの命と暮らしを支えてくれる草木に感謝するために建てた、という趣旨は読み取ることができました。

この石碑は「草木塔」あるいは「草木供養塔」とよばれるジャンルに属するものであり、東北地方に数多く見ることができます。最も密度が高いのは山形県、なかでも米沢市を中心とする置賜（おきたま）地域で、そこが草木供養塔発祥の地と考えられています。現在知られている最古の塔は、米沢市の田沢地区にある安永九（一七八〇）年のものです。

草木供養塔は不動尊公園の解説板にも書かれている通り、山で仕事をする人々が、切り倒した草木に感謝し、その霊を慰めるために建てたものでした。こうしたタイプの供養碑は、日本以外の地では

●佐藤弘夫　1953（昭和28）年宮城県生まれ。東北大学大学院文学研究科博士前期課程修了。博士（文学）。盛岡大学助教授等を経て現在、東北大学大学院文学研究科教授。専→門日本思想史。著書『アマテラスの変貌』『霊場の思想』『死者のゆくえ』『ヒトガミ信仰の系譜』『死者の花嫁 葬送と追想の列島史』他。近著『日本人と神』

最新刊大好評 本欄の連載を単行本にした『人は死んだらどこへ行けばいいのか』発売たちまち大反響！ ご注文は同封のハガキをご利用ください

ほとんど見ることができません。

考えてみれば、日本には草木供養塔以外にも、「鰻塚」「虫塚」「実験動物慰霊碑」など、人以外の生物を慰霊するためのたくさんのモニュメントがあります。長く働いてくれた針にも感謝する「針供養」なども、同様の発想にもとづくものといえるでしょう。しかし、わたしたちがあたりまえのこととして受け入れているこうした風習も、世界を見渡したとき、決してどこでもあるものではないのです。

なぜ日本に限ってこうした現象が顕著に見られるのでしょうか。草木供養塔には、しばしば「草木国土悉皆成仏」という言葉が刻まれています。人間だけでなく、あらゆる存在に成仏の可能性を認めるこの表現は、平安時代の仏教者、安然の著作に初めて現れるものです（末木文美士『草木成仏の思想』サンガ、二〇一五年）。室町時代に入ると、能の台詞などで頻繁にもちいられるようになります。

写真❷愛敬院の境内にある草木塔

草木供養塔の背景には、草木はもちろん、命をもたないと考えられている石ころの一つ一つにまで霊魂の内在を認める思想があったのです。

日本発のアニミズムへの共感

万物に霊の実在を見出すこうした発想は、しばしば「アニミズム」と表現され、日本文化を特色づけるものとして強調されてきました。その現代的な意義を強調したのが、京都の国際日本文化研究センター所長を務めた梅原猛氏でした。

梅原氏がこのテーマをめぐって論陣を張っていた一九八〇年から九〇年代の時期は、宗教学の世界では、まだ万物に霊を見出すアニミズムは宗教の最も原始的な形態と考えられていました。そのため神道は、一神教であるキリスト教やイスラム教などの高等宗教に較べたとき、進化から取り残された古い信仰の形とみなされていたのです。

そうした宗教学の常識に強く反発したのが梅原氏でした。彼が着目したものが、人間と人間以外の存在に差を設けないアニミズムの特性でした。それを端的に示すものが、この草木国土悉皆成仏の思想だったのです。

梅原氏は人間以外の動物や植物、果ては岩石などの無機物にまで内在する精霊を見出そうとするアニミズムが、人間と自然との共生を促す思想であると主張します。それは人と人以外のものとの間に明確な差別を設け、自然を人間による利用の対象としかみない西洋文明とは明らかな一線を画するものでした。梅原氏は日本発のアニミズムが、近代化に伴う自然破壊に歯止めをかけ、この地球上に秩序ある万物の共存を実現する「新しい人類の原理」であるとまで断言するのです（梅原猛「アニミズム再考」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』1、一九八九年）。

わたしは、縄文時代以来一貫する日本文化の特質を、アニミズムという言葉で総括しようとする梅原氏の見方に全面的に同意することはできません。なぜなら、日本列島における人と自然との関係は時代によって大きく変化しており、草木が人間と同じように霊を内在するという思想が広く共有されるようになるのは、室町時代以降の現象と考えているからです。ただし、万物に等しく霊性を見出そうとする思想が、現代において展開させるだけの意義をもっているという主張には共感を覚えます。

いま実際に、草木塔の思想に光があてられるという現象が生じています。たとえば山形大学では、大学運営の基本理念として「自然と人間の共生」を掲げ、キャンパス内に草木塔を建立するとともに、その理念を実現するため〈やまがた草木塔ネットワーク〉を立ち上げています。共生の精神を生かして、自然を大切にした大震災の復興と地域づくりを行うことを目標として掲げています。

海が人類の生存にとってかけがえのないものという認識にもとづいて、その浄化を試みる運動も盛んになっています。東北の三陸地域では、海の再生には健全な森の育成が不可欠であるとして、造林事業が行われています。気仙沼湾の牡蠣養殖業者が始めた「牡蠣の森を慕う会」は、古くから聖なる山として崇められてきた北上山地の室根山で、落葉広葉樹の植樹を進めています。

この地球を守るために、人間のもつ特権意識をいったん捨て去る必要があることが、共通認識として社会に定着し始めているのです。

かつてウイルスは「神」だった

わたしはこれまで、生物のみならず無生物にまで霊の内在と成仏の可能性を見出すアニミズムの思想が、日本列島において大きな影響力をもってきたことを述べました。それを踏まえて一つ考えてみたいことがあります。それはいま世界中を混乱の渦に巻き込んでいるコロナウイルスをどう捉えるべきかという問題です。

「草木国土悉皆成仏」の立場からすれば、ウイルスも当然のことながら霊を内に秘めた存在ということになります。成仏の可能性が認められていいはずです。実際にそう考えるべきなのでしょうか。ウイルスが「成仏」できるとすれば、それはこの現代社会でどのような意味をもっているのでしょうか。

前近代の日本では、流行病をもたらすウイルスや菌は「疫神」「疫病神」と表現されてきました。この言葉自体は現在でも使われているものですが、興味深い点は、人間に病気や死などの不利益をもたらすものに対して、「神」という形容が用いられていることです。

次頁に掲げた絵は鎌倉時代の『融通念仏縁起』に描かれた疫神の群れです（写真❸）。疫学の知識がなかった前近代で

は、感染症は遊行する疫病神がもたらすものと信じられてきました。邪悪な作用を本務とする疫病神は、可視化されるにあたって、このようなグロテスクな容姿で描写されることになったのです。

しかし、重要なのは、いかに忌み嫌われようとも、疫病神はどこまでも「神」だったことです。そのため、流行病を防ぐための対策は、疫病神を敵とみなして叩き潰すのではなく、手厚くもてなして、満足してお帰りいただく方法がとられることになりました。疫病を防ぐために道饗の祭、四角四境祭、やすらい花などの祭祀が行われましたが、その趣旨はいずれも疫病神を尊んで祭り上げ、静かにお引き取りいただくことにありました。

写真❸『融通念仏縁起』(中央公論社)に描く疫神の群れ

ときに、より強力な善神の力を借りて、疫神を退散させるという方法が用いられることはありましたが、基本的に、力ずくで退治するという手段は論外でした。疫病神は敬意を払うべき存在ではあっても、人が正面から立ち向かうような相手ではなかったのです。人の健康に有害なウイルスや菌を人類の敵とみなし、その根絶を目論むようになるのは、近代になってからの現象だったのです。

この変化の背後に感染症に対するどのような認識の変化があったのでしょうか。

人類への警告のサインとして

現代の日本に住むわたしたちは、よほど運が悪くない限り、平均寿命前後の歳まで生きることを当然と考えています。しかし、こうした認識は戦後になって初めて定着したものでした。少し時代を遡れば、人は明日の命も分からない無常の人生を過ごしていました。生まれ落ちた瞬間から、櫛の歯が欠けるようにこの世から人が消えていく時代が、長く続いてきたのです。

人が生命を失う最大の原因が飢饉でした。東日本では飢饉は冷害から始まりました。十八世紀後半の天明の大飢饉のときには、これに浅間山の噴火が加わりました。寒波と空を覆う噴煙の影響が重なって記録的な冷夏となり、作物の収穫は激減しました。

人はただ生存するために、あらゆる努力を傾けました。口にできるものは、野草から樹木の皮まですべて食べ尽くしました。馬や牛などの家畜はもちろん、犬猫までが食料となりました。人肉に手を出した人々もいました。

その一方で、口減らしのために、弱者の淘汰が行われました。「間引き」と呼ばれる赤子殺しや人身売買が行われました。この列島に、かつて命の選別が日常的に行われるような時代があったのです。

健康な体であれば心配する必要のない感染症も、抵抗力を失った身体では防ぐことは不可能でした。飢饉に襲われた地域では、必ずといってよいほど疫病の流行が伴いました。人々は、そうした病をもたらし命を奪うものたちを、「神」と規定するのです。

なぜ神でなければならなかったのでしょうか。前近代の社会では、人生はこの世だけで完結することはありませんでした。生と死の世界は繋がっていました。いつ死ぬか分からないような不安定な時代であるからこそ、死後の命運はきわめて重要でした。その二つの世界を媒介する役割を担っていたのが、人間を超えた存在=神だったのです。

人は、疫病で命を落とすことを単なる偶然や、たまたまの不運と捉えるのではなく、神の意思と考えることで、その死の必然性を受け入れようとしたのです。

繰り返される生と死の循環のなかで、神を介在させることによって、次生でのあり方が少しでもよい方向に向かうことを願ったのです。

こうした発想は、感染症に対する科学的な知見が共有される現代社会では、もはや受け入れられることはありません。コロナウイルスは闘って撲滅する対象ではあっても、敬意を払おうとする人はだれもいないでしょう。

しかし、一歩退いて考えてみてください。わたしたち人間はコロナウイルスを非難できるような立派な存在なのでしょうか。いま人間の生活が環境に与えた影響によって、世界各地で異常気象が相次いでいます。東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故は、人類がみずからを滅ぼすだけの力を身につけたことをまざまざと見せつけるものでした。

人間はといえば、こうした地球規模の危機に力を合わせて対応するどころか、人種・宗教・国籍を口実にした対立はますますエスカレートしています。

わたし自身を振り返ってみても、地球に負荷をかけることが分かっていながら、いまの便利で快適な生活を手放すことはできません。この地球にとってもっとも危険な存在は、実は人類そのものなのかもしれません。

ときに命を奪われるケースがあっても、人はウイルスや菌なくして、いっときも生きながらえることはできません。コロナウイルスの蔓延は、特権的な地位にあぐらをかき、地球そのものを滅亡の危機に晒している人類に対する、共棲者からのきびしい警告のサインなのではないでしょうか。

わたしたちはウイルスを仇敵としてのみ捉えるのではなく、ときにはそれが発するメッセージに謙虚に耳を傾けてみることも必要だと思います。それが流行病を神の仕業とみなし、万物に聖なる命を見出そうとした、過去の人々の知恵に学ぼうとする姿勢であるように思われるのです。

〔つづく〕